

令和 8 年 8 月 宝塚市長定例記者会見 議事録

日 時 8 月 21 日(金) 10 時 30 分から 11 時 30 分まで 場 所 特別会議室

出席者 (市) 市長、副市長、市立病院救急診療担当病院長、危機管理監、社会教育部長、社会教育部総括担当及び社会教育担当次長、中央図書館長、秘書課長、丸橋小学校主幹教諭

出席者 (記者クラブ) 読売新聞社、朝日新聞社、神戸新聞社、共同通信社

1 発表案件

(1)令和 8 年熊本地震被災地への宝塚市の支援状況

(総合防災課)

【質疑】

(記者) 病院関係の DMAT (災害派遣医療チーム) との関係についてお伺いします。一般的なイメージですと、現場に入って救護活動などを行うイメージがありますが。

(担当) 現場に出るというよりは、指名されて本部機能に回されたということになります。我々が行ったことは、一般の方向けの物資対応ではなく、病院、診療所、老健施設などの医療関係・介護関係施設からの物品に対する要請を受け、それを正確に伝達するという役割でした。やはり医療機関に関しては、必要な物や水に関しても種類や量が異なります。また、スポットクーラーがない、あるいはトイレが足りないといった、医療機関や介護施設独特の要望があります。それに関しましては、やはり医療関係者が適切に判断してトリアージを行うことが重要であり、そういった理由で指名されたのだと考えております。

(記者) 宝塚市立病院の DMAT としては、かなり経験を積んで熟練しているということなのでしょう。

(担当) そうですね。10 年前はもちろんのこと、それ以前の東北の震災から始まり、熊本、そして能登の地震の際にも派遣しております。当院の DMAT は全員が被災地への派遣を経験しております。平時からの訓練や研修も十分に行っておりますので、かなり高く評価されているものと考えております。

(記者) 先ほどペットボトルの写真があり、飲料水とのことでしたが、色を見ると茶色っぽいのですが。

(担当) お茶になります。物資集積所は、東京ドームの半分以上の広さの場所に大量の物資が置かれています。飲料水の品質をしっかりと確認しなければならないと考え、本当に大丈夫だろうかと注意しながらチェックしている際の写真です。銘柄も記載されておらず、かなり心配して確認いたしました。担当が他の方を写さないように配慮したため、ペットボトルの列だけの写真となっておりますが、やはり水とトイレが一番重要であると実感いたしました。トイレに関してですが、

排泄物をラップで包むというものがあり、少し具体的に説明いたしますと、箱型の形状になっており、その上で排泄するとラップでポンと包まれ、適切に処理されてニオイもしないという製品です。「ラップポン」というもので、私も初めて写真で見ましたが、そのようなものがあるそうです。それを必要とされている施設へ、本部で待機しているよりは届けてこようということで、いくつかお配りした実績がございます。

(記者) 小学校の先生にお伺いします。来週からも、もう一度被災地に入られるとのことですが、具体的には何日からでしょうか。

(担当) 来週の月曜日、24日から金曜日までの期間になります。

(記者) 24日からとなりますと、学校再開に向けて非常に重要な時期だと思いますが、具体的にはどのような活動をされるのでしょうか。

(担当) 現在、第一陣の派遣部隊が校内の片付けなどを行っていますが、現場の課題として浮上しているのが「心のケア」です。子どもたちが登校してきた際にどのような対応をすべきか相談を受けているため、心のケアに関する研修や、今後の防災訓練の実施方法について検討します。緊急地震速報の音に恐怖を覚える子どももいるため、そうした状況下での研修のあり方も課題です。今回は夏季休業中であつたことが救いでしたが、今後も起こり得ることですので、これまで以上にどのような対策を講じるべきかという研修面での支援を行います。

また、学校再開に向けての実務的な支援も行います。先ほどご覧いただいた中学校のように、プリント類がすべて水没してしまったためそれを乾かす作業や、受験勉強が遅れてしまっている中学3年生への学習フォローなどを予定しています。さらに、教職員の方々と共に校区を回り、危険箇所を確認した上で通学路の変更を検討する安全マップの作成など、こうした流れで進めていく予定となっております。

(記者) 第二次派遣の EARTH（震災・学校支援チーム）のメンバーは、先生を含めてどのくらいいらっしゃるのでしょうか。

(担当) 第一陣は17名が赴いております。第二次の正確な人数についてはまだ詳しく伺っておりませんが、同程度の人数になるかと思われます。被災地で活動されている方々の様子を見るだけでも、どのような思いを抱えていらっしゃるのかと非常に不安に感じた部分がありました。子どもたちは、今まで通っていた通学路が通れなくなっていたり、壊れていたりするのを見るだけで、怖い思いがフラッシュバックしてしまう可能性があります。そのため、心のケアの支えになりたいと考えています。私自身が阪神・淡路大震災からどのように立ち直ったか、どのように頑張ってきたかという経験をもう一度振り返り、それを支援につなげていければと思っています。

(記者) 小学校3年生の時に被災されたとのことですが、具体的に記憶に残っていること

はございますか。

(担当) 当時、宝塚市に住んでおり、実際に車中泊を経験しました。バラ公園の近くに電柱も何もない場所があったため、父親の車でそこで車中泊をさせてもらいました。お弁当は大阪の方まで買いに行っていました。暖房が効いている車内では腐ってしまうため外に置いておき、カチコチに凍ってしまったお弁当を必死に溶かして食べたという記憶があります。また、倒壊した建物から、共助として皆で協力して人を救い出す様子を、子どもながらに車の中から見ておりました。そのような光景は本当に鮮明に思い出すことができます。

そして何より、おにぎりの大切さです。避難所へ行った際に「この 1 個をどうぞ」と渡された時の嬉しさや、食料のありがたみを痛感しました。普段できることができなくなる、当たり前が当たり前ではなくなるという感覚は、熊本の方々も同様に感じていらっしゃると思います。寄り添うとまでは言えませんが、何かの力になればと考えております。

(記者) 通っていた小学校は避難所になっていたのでしょうか。車中泊は何日間くらいされたのですか。

(担当) はい、避難所になっておりました。避難所での体験としては、本当に車中泊をしながらおにぎりをもらいに行ったり、親戚のところへ行かせていただいたりしました。また、大阪の方までお風呂に入りに行ったり、ブルーシートを買って帰り、父親が他の家にかかる手伝いをしたりする様子を見てきました。そのため、困っている人がいたら助けるのが当たり前だという感覚は、今でもずっと心に残っています。

かなりの間、自宅が半壊状態でしたので、何日間かは車中泊を続けました。昼間は家の前に車を停めて、私は外に出ていましたが、車のエンジンをかけてラジオから流れる情報だけを聞いていました。今のようにテレビがなかったためです。余震が来ると、父親と母親が家から飛び出してくて「大丈夫か」と声をかけてくる、その繰り返しをずっとしていた覚えがあり、家に帰って寝たという記憶はあまりありません。そうした小学校時代の阪神・淡路大震災での体験を、今回の支援にも活かしたいと考えております。

(次頁あり)

(2)宝塚市出身作家・鳥山まことさん 市特別賞贈呈式を開催

(中央図書館・秘書課)

(記者) 鳥山さんについてですが、宝塚市生まれということで、大学は京都とのことですが、いつからいつまで宝塚にいらっしまったかについては発表されていますでしょうか。

(担当) 今回の企画が決定した際に、鳥山様に直接お電話させていただき確認いたしました。しかし、プロフィール等は全て非公開とされており、詳細なことは教えていただけませんでした。ただ、著書『時の家』にも記載されております通り宝塚市のご出身であり、「生まれも育ちも宝塚で、宝塚に思い入れはある」というお言葉はいただいております。それ以外の情報につきましては、公表されておられません。

(記者) 抽選で 120 名とのことですが、こちらは市民以外の方、つまり市外在住の方も応募可能なのでしょうか。

(担当) 市内外を問わず、応募可能とさせていただきます。

(記者) 市長に伺います。「時の家」を読んだ感想を教えてください。

(市長) 居する家族が変わっても、それぞれの生活や思い出が家に記憶されるような素敵な小説で、すぐ読み切りました。

(記者) 現在プレスリリースで使用している写真は、報道に際して紙面などで使用することは可能でしょうか。

(担当) 鳥山様からは、撮影者である渡辺充俊様のクレジットと、講談社というキャプションの記載があれば使用可能であると伺っております。写真を使用される際は、こちらの条件を必ず記載いただくようお願いいたします。

(記者) 「撮影：渡辺充俊様」などが入っていれば使用可能ということですね。

(担当) おっしゃるとおりでございます。

(記者) 今回の会場が市民ホールということで、今後、市民ホールが本来の役割を取り戻すにあたっての、再開第 1 弾の企画という認識でよろしいでしょうか。

また、村野建築に関してですが、鳥山様は今回の村野建築で講演されることについて、事前に何かおっしゃっていたことはありますでしょうか。

(担当) お電話で会場が市民ホールであることはお伝えしておりましたが、10 月から使用可能になるという調整が直前であったため、詳細についてはまだしっかりとお話ができおりません。ただ、建築家である村野様のお名前はお伝えした上で、ホールでの開催ということで、熱心に講演してくださると伺っています。

(次頁あり)

2 その他

【質疑】

(記者) 手塚治虫さんに関連して、8月12日にNHK総合テレビで「手塚治虫の戦争」というドラマが放送されましたが、市長はご覧になりましたでしょうか。ご覧になった場合は、どのような感想を持たれたか教えてください。

(市長) はい、リアルタイムでNHK総合テレビにて拝見いたしました。私自身も原作の漫画を読んでおりましたので、「このシーンだな」と思い出しながら拝見しました。改めて、手塚治虫さんの描く人間ドラマでありつつ、その背景にある戦争に対する思いが伝わってきました。単純に「戦争はだめだ」と主張するだけでなく、人間らしさの中で平和を希求するというメッセージが見えたように感じております。NHKも様々な工夫を凝らし、手塚治虫さんのメッセージをありのままの形で見せていただいたのではないかと思います、大変ありがたく視聴いたしました。

(記者) 現在、市を含めて様々な関係団体とドラマ誘致の署名活動をされていますが、これとの関係性を教えてください。

(担当) 直接は関係ありませんが、「手塚治虫の戦争」をきっかけとして手塚治虫ありということを皆さんにもう一度思い出していただいて、機運が高まっていけばいいなと思います。

(記者) 先日、宝塚市立病院におけるX線画像の持ち出しに関する発表と、それに先立つ報道がございました。この件について、グレーな部分もあるかと存じますが、森市長の見解をお聞かせください。

(市長) 様々な報告を受けておりますが、やはり客観的に見て、大変不適切な部分が多かったと認識しております。一方で、医療機関や医療に関わる情報が医療の発展のために活用されることは非常に重要です。例えば、症例検討会や学会での研究といった枠組みの中であれば、それは本当に意義のあることです。しかし、患者様個人のプライバシーに関わる大切な情報が、本来とは異なる形で流出したり、誤って取り扱われたりすることは、絶対にあってはならないことだと考えております。今回の件を受け、私自身、大変申し訳なく思っております。同時に、何がいけないことで、何が許容されることか、あるいはむしろ推奨されるべきことなのかを、関係者間でしっかりと整理しなければならないと伝えております。表面的に「個人情報とは何か」を定義することは簡単ですが、医療や医学の分野においては非常に難しく、時代的にもさらに困難になっています。例えば、今回のレントゲン画像につきましても、フィルムに氏名、住所、生年月日、病院名といった記載がなかったとしても、骨の形状から個人を照合し、識別することが可能なわけですから、複数の情報を照らし合わ

せることで個人を特定することは不可能ではありません。ビッグデータの時代において、どのように情報を守っていくかという新たな課題ではありますが、今回の件を重く受け止め、教訓として生かしてまいります。個別の患者様へ誠実に対応させていただくことは当然として、それを踏まえた上でしっかりと情報管理の整理を行い、今後の学びの機会としてまいりたいと考えております。

(記者) 朝日新聞の報道が出た後、複数の医療機関の名前が挙がっていましたが、きちんと記者会見を開いて公表したのは、おそらく宝塚市立病院だけかと思えます。この公表につきましては、市長のご意思が働いていたのでしょうか。

(市長) 私から直接指示を出したというよりも、私たち自身の共通認識(コンセンサス)として、「可能な限り情報をオープンにしていく」という方針がございます。その中で、市立病院として公表すべきものはしっかりと公表しようという判断に至ったものです。市役所内、あるいは市の組織全体にそうした透明性を重んじる空気感がある結果だと考えております。

(記者) 先日発表がありましたように、西谷地域におけるオンデマンド交通と定期運行への移行にあたり、今年度末に阪急バスが運行を終了する予定のところ、これが半年間前倒しとなっております。その辺りの事情についてお聞かせください。

(市長) 阪急バスの運行終了が半年間前倒しになった詳細な事情につきましては、恐れ入りますが担当課に確認していただければと存じます。ただ、今回の試験運行は、次年度以降の継続的な運行を見据えて実施するというのが基本方針です。仮に阪急バスと並行して運行を行ってしまった場合、市民の皆様がこれまで使い慣れた阪急バスを利用されることになり、現実的な実証実験として十分に機能しないのではないかと考えております。実際に人の動きがどのように変化し、どのような点に不便が生じるのか、あるいはどのようなニーズを拾い上げるべきかといった微調整ができなくなるという懸念が、前倒しの大きな要因の一つではないかと推測しております。

(記者) 今回のオンデマンド交通の導入は、宝塚市にとっても今後の試金石になるとお考えでしょうか。

(市長) おっしゃる通りです。実は内々に、交通に関する勉強会を現在継続して実施しております。交通のあり方というのは、どの基礎自治体にとっても非常に重要であり、かつ大きな転換期を迎えていると認識しております。その意味でも、西谷地域においてオンデマンド交通と定期運行を組み合わせたモデルを試行することは、非常に重要な試金石となります。西谷地域はもちろんですが、本市は山手地域においても様々なバス交通の課題を抱えており、市内全域でも

同様の課題が存在します。今回の取り組みを通じて大きな知見を得たいと考えておりますし、真の意味で持続可能な公共交通のあり方を追求するための、重要な取り組みであると感じております。

(記者) 電話での受付も用意されているようですが、基本的にはスマートフォンでの予約対応になるかと思います。スマートフォンに不慣れな方に対しては、どのような対応を想定されているのでしょうか。

(市長) 運営の合理性を考慮しますと、スマートフォンのアプリによる予約制が最も効率的ではありますが。しかしながら、高齢者の方々を中心にスマートフォンの操作に不慣れな方もいらっしゃいますし、市外から訪れる観光客の皆様が本市の予約システムをご存じない可能性もございます。そうした場合には、やはり電話での受付の方が利用のハードルが低いと考えられますので、アプリと電話を併用して対応してまいります。実際のところ、電話とアプリの利用割合や使い勝手といった点も含め、今回の実証実験の中で検証していく作業になると考えております。

(記者) 西谷地域にはダリア園や牡丹園などがあり、観光のポテンシャルが非常に高い地域だと思います。しかし現状は、マイカーでないと移動が難しい場所が多い中で、今回のオンデマンド交通に観光面での期待はされているのでしょうか。

(市長) もちろん、主眼は地域住民の皆様のご生活の足の確保や、子どもたちの通学にあります。当然ながら観光目的での利用にも繋がってほしいと期待しております。特に西谷地域におきましては、ダリア園や牡丹園など、観光のターゲットとなる魅力的なスポットが数多くございますので、観光客にとっても使い勝手の良いものであってほしいと感じております。一方で、難しい側面もあると認識しております。従来の定期バス路線であれば、地図上に路線図が明記され、市外から来られる方も経路検索等で容易に調べることができますが、オンデマンド交通の場合は同様にはいきません。そのため、観光客の皆様へどこまで訴求し、利用を促せるかが我々に試されている点だと考えております。今回の取り組みでこれまでの観光課題がすべて解決するとは思っておりませんが、新しい交通のあり方を模索する中で、「観光利用においてはどのような新たな課題が見えてくるか」を検証するための、一つの取り組みであると位置づけております。

以上